薩摩川内市里八幡神社所蔵の大般若経について

栗林文夫

はじめに

黎明館の資料調査収集協力員を長年お務めいただいている肱岡修一郎氏から二〇〇六年度末に、一一月一六日付けの調査報告カードをご提出いただいた。そのカードには薩摩川内市里町（上甑島）の八幡神社[1]所蔵の大般若波羅蜜多経（以下、大般若経と略記する）六〇〇巻についての報告が五枚の写真と共に詳しく書かれていた。当時は保管状況があまり良くなく、保存に向けての早急な対応策を講じる必要性が強調されていた。

その後、この大般若経は二〇〇七年五月一六日に薩摩川内市川内歴史資料館に一時預かりされる事が決まり、資料保存に向けての当面の策が講じられる事となった。筆者も右の調査報告カードを見てから、この大般若経の資料的重要性を認識していたが、未だ調査を果たせないでいた。

二〇〇九年度になって、所蔵者の日笠山正治氏と保管者の薩摩川内市川内歴史資料館のご許可を得て、資料調査の機会をいただいた。小稿はその際の調査報告である。

調査は二〇〇九年度に合計四回、保管先の薩摩川内市川内歴史資料館において実施した。日程と調査参加者は次の通りである

【第一回調査】二〇〇九年五月一三日

調査参加者：栗林文夫・加治佐亜矢子・早田里佳

【第二回調査】二〇〇九年六月一八日

調査参加者：栗林・新福大健・加治佐

【第三回調査】二〇〇九年一一月二七日

調査参加者：栗林

【第四回調査】二〇一〇年一月二九日

調査参加者：栗林

猶、里八幡神社と日笠山文書の調査を現地上甑島で、二〇一一年三月九・一〇の両日、吉本明弘氏（薩摩川内市川内歴史資料館主任・学芸員）と栗林が合同で実施した。

一　大般若経の概要

大般若経を有する里八幡神社は、新田八幡宮[2]、八幡新田宮・八幡宮・新田宮[3]、新田八幡神社[4]等様々な名称で呼ばれていた。

まず里八幡神社の由緒について、『地誌備考　甑島郡』所収の『甑島旧跡考』の記述から見てみたい。

【史料一】『甑島旧跡考[5]』　※〈　〉はワリ書、以下同

新田八幡宮

里村に鎮座す、里村の地頭仮屋を距る事、巳方五拾間余、祭神天津彦火々瓊々杵尊、中央木像安座〈高さ九寸二重連台、高さ五寸七部装束アリ〉、左右木像二座〈高さ皆壱尺三寸余〉、嘉祥二年（八四九）薩州千台八幡宮の社家宮里壱岐といふもの神体を守渡りて勧請すと云、毎歳九月十九日をもて正祭とす、神職日笠山某祭祀を司る、往古は宮司坊といふ別当寺もありけれと、今は本福寺住僧より勤来りしとなん、

民家の童子神前に相撲を興行す、謂れこと、聞ゆ、何の年より始りしを詳らかにせず、許多の棟札を社内に納む、天正十五亥十一月造立、宮司坊沙門秀善、寛永拾六卯二月造立、地頭本田伊賀守、慶安二己丑三月造立、地頭比志島監物範貞、寛永三癸卯七月造立、地頭比志島範貞、元禄七甲戌十月、地頭木脇刑部左衛門と各記せり、

この他、『薩藩名勝志』『三国名勝図会』『薩隅日地理纂考』等の記述を比較してもほぼ同内容である。川内の八幡新田宮と同じ社名であることから、川内から勧請されたものであることが明らかである。その時期を嘉祥二年（八四九）というかなり早い時期に設定しているが、やはり最古の棟札が書かれた天正一五年前後の時期が一つの目安となるのではなかろうか。

『甑島旧跡考』が書かれた当時、日笠山某が神職であったとあるが、往古は宮司坊という別当寺があったという。天正一五年の棟札に「宮司坊沙門秀善」とあることから、この頃まで宮司坊があったことが確認できる。日笠山氏は甑島の中でかなりの勢力を有していたようで、里八幡神社以外で神職を務めたのは、甑島大明神（上甑村串瀬戸）・八幡新田宮（下甑村手打）・大多羅姫宮（下甑村瀬々浦）・六王大明神祠（上甑村中甑）[6]・講元大明神（上甑村里）・敷塩大明神（下甑村長浜）[7]等複数の神社に及んでいる。現在の所蔵者日笠山正治氏は里八幡神社の神職日笠山氏の子孫にあたる。

大般若経の装幀は折本で全て版本である。統一された茶地の表紙が付されている。紙高が約二五cm、第二紙の幅が約四四cm、第二紙一紙の行数も二三～二四行を数える。これらの計測値から大きく外れる巻はなく、六〇〇巻全てが同一時期にまとめて製作されたものと判断した。従って、通常の大般若経の調査で採用されている各巻毎の詳細な計測は行わなかった。

一〇巻ずつ帙に入れられ、一〇帙が木製の箱六つに、上下二段ずつに収められている[8]（【写真】3・6）。箱蓋の内側には、「平成九年九月吉日／掘田静正工務店謹製／第五百壱巻～第六百巻」（【写真】4）のように墨書があり、比較的最近になって作られた木箱であることがわかる。

一巻ずつの状態は必ずしも良好なものばかりではなく、例えば虫喰いや、紙継ぎ目の糊が剥がれたものや、表紙の題箋が剥がれているもの、帙が破損しているもの等が幾つか見受けられた。しかし、一巻も欠けることなく六〇〇巻全て揃っていることは、鹿児島県においては特筆に値する[9]。

巻第六〇〇の識語によれば、「寛文十庚戌仲冬吉日／中野氏是心板行／板木細工人／藤井六左衛門」とある（【写真】50）。中野是心は通称を小左衛門（二代目）といい、三代続いた京都の書肆である。仏教や儒学の書等を数多く出版した。延宝五年（一六七七）に死去している[10]。

この中野是心により版行された大般若経について、関連史料が若干伝わっている。すなわち、寛政四年（一七九二）に祖芳が『般若堂印行大般若校異』一巻を出版したが、その自序において出版に至る経緯を述べている。

京都の書肆の中野是心はかねてから京都で大般若経の出版がないことを残念に思っていた。たまたま寛文一〇年（一六七〇）の冬、古本を得て四四〇〇枚の板に刻んだ。安永五年（一七七六）に至りその板は近藤為貞が所蔵するところとなり、私（祖芳）が校訂を頼まれた[11]。

寛文一〇年刊行の大般若経というのが、今回調査した大般若経そのものと推測される。四四〇〇枚の版木があったこと、是心が亡くなる前年にその版木は別人の手に渡っていたことなどがここからわかる。

二　大般若経の奥書

前章で述べたように、京都の書肆により刊行された大般若経であるので、全ての巻が同一規格である。そこで本章では、各巻の奥書を紹介して、大般若経の寄進者・寄進の時期・寄進の理由等を明らかにしたい。

【巻第五〇一】　貞享五戊辰年九月廿二日
（【写真】7）　随喜主薩州阿久根住
河南市郎左衛門
十巻之内

【巻第五〇二】　貞享五戊辰年九月廿二日
（【写真】8）　薩州阿久根住
随喜主
河南市郎左衛門
十巻之内

【巻第五〇三】　貞享五戊辰年九月廿二日
（【写真】9）　薩州阿久根住
随喜主
河南市郎左衛門
十巻之内

【巻第五〇四】　貞享五戊辰年九月廿二日
（【写真】10）　薩州阿久根住
河南市郎左衛門嫡子（門脇カ）
十巻之内　河南伍右衛門

【巻第五〇五】　九月廿二日
（【写真】11）　河南市郎左衛門嫡子
河南伍右衛門
十巻之内

【巻第五〇六】　九月廿二日
（【写真】12）　河南伍右衛門嫡子
河南松千代
十巻之内

【巻第五〇七】　九月廿二日
（【写真】13）　河南市郎左衛門
女房
十巻之内

【巻第五〇八】　九月廿二日
（【写真】14）　河南伍右衛門
女房
十巻之内

【巻第五〇九】　九月廿二日
（【写真】15）　十巻之内　河南市郎左衛（門脱カ）娘　きん

【巻第五一〇】　河南市郎左衛門娘　たま
（【写真】16）

【巻第五一一】　貞享五戊辰暦晩秋二十二日　随喜主　薩摩国阿久根之住　河南源左衛門
（【写真】17）　二十巻之内　根實

【巻第五一二】　貞享五戊辰天晩秋二十二日　河南源左衛門　随喜主
（【写真】18）　二十巻之内

【巻第五一三】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】19）

【巻第五一四】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】20）

【巻第五一五】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】21）　二十巻之内　河南源左衛門

【巻第五一六】
（【写真】22）

【巻第五一七】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】23）

【巻第五一八】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】24）

【巻第五一九】　二十巻内　河南源左衛門
（【写真】25）

【巻第五二〇】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】26）

【巻第五二一】　二十巻之　河南源左衛門
（【写真】27）

【巻第五二二】　二十巻之内　河南源左衛門
（【写真】28）

【巻第五二三】　二十巻内

（写真）29）　河南源左衛門

【巻第五二四】　二十巻之内
（写真）30）　河南源左衛門

【巻第五二五】　二十巻之内
（写真）31）　河南源左衛門

【巻第五二六】　二十巻之内
（写真）32）　河南源左衛門

【巻第五二七】　二十巻之内
（写真）33）　河南源左衛門

【巻第五二八】　二十巻之内
（写真）34）　河南源左衛門

【巻第五二九】　二十巻之内
（写真）35）　河南源左衛門

【巻第五三〇】　貞享五戊辰年九月廿二日
（写真）36）　随喜主　薩州阿久根住
二十巻之内
河南源左衛門

【巻第五三一】　貞享五戊辰年九月廿二日
（写真）37）　薩州阿久根住
七巻之内　天水彦左衛門

【巻第五三二】　七巻之内
（写真）38）　天水彦左衛門

【巻第五三三】　七巻之内
（写真）39）　天水彦左衛門

【巻第五三四】　七巻之内
（写真）40）　天水彦左衛門

【巻第五三五】　七巻之内
（写真）41）　天水彦左衛門

【巻第五三六】　七巻之内
（写真）42）　天水彦左衛門

【巻第五三七】　七巻之内
（写真）43）　天水彦左衛門

根實

【巻第五三八】　貞享五戊辰年九月廿二日
（【写真】44）　三巻之内　折口伊兵衛

【巻第五三九】　九月廿二日
（【写真】45）　折口伊兵衛二男　折口久三郎

【巻第五四〇】　三巻之内
（【写真】46）　折口伊兵衛

【巻第五四一】　貞享五戊辰年九月廿二日
（【写真】47）　薩州阿久根之住　中尾市左衛門

【巻第五四二】　三巻之内
（【写真】48）　中尾市左衛門

【巻第五四三】　三巻之内
（【写真】49）　中尾市左衛門

以上のように、奥書が書かれているのは巻第五〇一から巻第五四三にかけてのみで、これ以外に奥書は全く見られない。[12] 奥書が見られない巻第一から巻第五〇〇、巻第五四四から巻第六〇〇を寄進したのが誰であるのか不明である。

年月日が記されていない巻もあるが、全て貞享五年（一六八八）九月二二日の寄進と考えて差し支えなかろう。

次に寄進者について考えてみたい。

河南市郎左衛門　巻第五〇一から巻第五一〇までを寄進している。「全十巻」と表記された巻は、巻第五〇二から巻第五〇九までの合計八巻であるが、これに巻第五〇一と巻第五一〇を加えた数が「全十巻」なのであろう。寄進者は彼の女房、嫡子伍右衛門、娘のきん・たま、伍右衛門の女房、孫の松千代の合計七名に及んでいる。河南市郎左衛門に「随喜主薩州阿久根住」という注記がある。これらの奥書から河南市郎左衛門の家族関係が明らかとなって興味深い。

河南氏の祖は中国から琉球に亡命した藍会栄（らんかいえい）である。その後会栄は薩摩藩の唐通詞となり、日本名の名字と帯刀を許され、三〇〇石の高禄で士分に取り立てられ阿久根に住した。会栄は生まれ故郷の中国河南省の「河南」を採って姓とし、名を源兵衛と改めた。初代河南源兵衛である。大般若経の寄進者河南市郎左衛門は、この初代源兵衛の長男で名を亮庸といった。彼以降、この流れは士族となった。[13] 市郎左衛門は唐通詞を務めている。[14]

河南源左衛門　巻第五一一から巻第五三〇までの合計二〇巻を寄進している。奥書がある寄進者の中では最も多い。名を根実（もとざね）と言い、「随喜主薩州阿久根之住」と記されている。根実は初代源兵衛の二男で、この流れは商家となり、御用商人として目覚ましい発展を遂げた。[15]

天水彦左衛門　巻第五三一から巻第五三七までの七巻を寄進している。「薩州阿久根住」とある。

天水が書き残した『崎陽古今物語』[16]の解題によれば、彼は元和の頃（一六二〇年前後）阿久根に生まれ、寛永一〇年（一六三三）一二、三歳の頃から長崎に出て、海外貿易関係の仕事に従事し、八〇歳の老齢まで長崎で暮らしていたとある。また本文中にも、鹿児島から長崎に出ていた商人が都合一〇人おり、阿久根から河南市左衛門・同源左衛門と天水彦左衛門の三人がいたことが書かれている。この二名は右で見た河南市郎左衛門と河南源左衛門のことであろう。天水彦左衛門も唐通詞を務めていた。[17]

折口伊兵衛　巻第五三八・巻第五四〇の合計二巻を寄進している。巻第五三九は折口伊兵衛の二男折口久三郎の名で寄進されている。

折口伊兵衛とは焼酎「阿久根諸白」の製造で名を馳せた人物である。代々当主は伊兵衛を名乗っているが、この伊兵衛は二代目の重次である。伊兵衛は「折口氏系図」[18]によれば、「〇重次　市右衛門、伊兵衛、〇（ママ）為重次二男、父重好遺跡相続、而太守綱貴公進献美酒〈号阿久根諸白〉二樽美肴、奉拝謁也、此時阿久根地頭相良主税也、有命改市右衛門名賜伊兵衛、其後儲君吉貴公奉拝謁也、〇正徳元年（一七一一）辛卯九月五日死、歳七十有余、法名正泉善岡居士」とある。すなわち、藩主綱貴に美酒「阿久根諸白」を献上し拝謁したこと、命によって市右衛門から伊兵衛に名を変えたこと、その後、綱貴の子吉貴にも拝謁したことなどが記されている。

一方、子の久三郎に関して、同じく「折口氏系図」によれば、「●重次　久三郎、作左衛門、伊兵衛、〇父之貴（浜カ）跡相続、而進献美酒大守吉貴公涌（浄カ）国院殿及儲君継豊公奉拝謁者也、〇寛延三年（一七五〇）寅午十二月二十一日死、法名徳岩智功居士」とあり、父子で同名であったことがわかる。美酒を時の藩主吉貴と嫡子継豊に献上し拝謁したことも記される。

このように折口氏は焼酎製造で財をなし、藩主に焼酎を献上するほどであった。また琉球貿易も小規模ながら藩に認められ、重好（重次の父、初代伊兵衛）は一時期唐通詞にも任ぜられた。また彼はこれらの功績により、士分の商人として名字帯刀を許された。[19]

中尾市左衛門　巻第五四一から巻第五四三までの合計三巻を寄進している。「薩州阿久根之住」とある。

この人物に関しては今のところ関連史料を見出し得ないが、中尾氏については、『阿久根市誌』に「会栄（鄭氏出自源氏衛）は阿久根におちつくと、これも中国帰化人の子孫という中尾戸右衛門の娘を妻に迎え、二男一女をもうけた」とある記述が参考になる（三五一頁）。註（13）の「藍氏三官流系図」に中尾戸右衛門の娘の事は書かれているが、「中国帰化人の子孫」であったかどうか、今のところ確認できない。しかし、中尾氏が河南氏と縁戚関係にあったことは間違いないので、このような理由から大般若経の寄進に関与したのであろうか。

他に『阿久根市誌』に、明治初年の「中尾次郎右衛門」（二八七頁）、郷士屋敷略図の中に「中尾市右衛門」「中尾新左衛門」「中尾六郎右衛門」（二三〇頁）等の名が見えるが、市左衛門との関係性については不明である。

以上、大般若経の寄進者に関して、史料をもとに可能な限りその素性を明らかにした。いずれも阿久根に居住する大変裕福な商人達であったことがわかった。

それでは彼らは何故、大般若経を里八幡神社に寄進したのであろうか。次の史料はその理由を語ってくれる。

【史料二】延享四年（一七四七）卯一一月一五日　『上甑島里村　神社改帳　留』[20]

一、宝物（中略）

一、大般若経壱部、当島鰯漁繁栄之折、御国者他国者為漁方罷居候相中より寄進、外ニ古本御座候得共、年久ゞ破損物ニ相成候故、納方相中より右之通為致寄進之由候、外宝物無御座候、

これによると、大般若経は甑島が鰯漁で繁栄していた時、国の者や他国者達が鰯漁のために居た相中から寄進された。別に古い大般若経があったが、年月も経過して破損したので、相中から寄進した。この他には宝物はないとある。

現存の大般若経の寄進が貞享五年（一六八八）九月二二日であったので、右の史料にでてくる大般若経は同一のものであろう。この史料から、二点の重要な事実が浮かび上がってくる。

①鰯漁が盛んであった頃、国内外から多くの人々が漁のために集まって来ていた。その鰯漁に関わった人々の集団（相中）から大般若経が寄進された。既に見た河南市郎左衛門・河南源左衛門・天水彦左衛門・折口伊兵衛・中尾市左衛門等寄進者達は鰯漁相中の関係者達であったことがわかる。彼らが実際に漁に関与していたというよりも、裕福な商人達ばかりであったことから、鰯漁の実質的な経営者達であったと推測される。

②現存の大般若経とは別に古本が存在していたが、年代が長く経って破損していた。貞享五年に寄進された大般若経よりも更に古い大般若経が存在していたことが確認できる。「年久ゞ破損物ニ相成候」とあることから、中世にまで遡る大般若経であった可能性が高い。これに関連して、当神社に所蔵されている「釈迦十六善神像」の存在も重要である。これは安永六年（一七七六）日笠山主膳景正による寄進であるが、画像そのものは中世のものであるという。[21] 釈迦十六善神像は大般若経転読の際に本尊とされる画像であるので、大般若経の「古本」と共に使用されていたものであろうか。

三　大般若経の歴史的意義

里八幡神社に伝えられた大般若経は、当神社独特の利用のされかたをしてきた。それが「お経どん」と呼ばれる行事で、概略次のごときものである。

「お経どん」とは行事そのものを言う場合と、ここにある「お札」をいう場合とがあり、行事は旧暦の一月十一日、新田八幡宮より出される「お経どん」のお札に一夜水に浸した御米をそえてモロブタに入れ数人で肩にかつぎながら各家庭に頒布して廻るものであります。これは本来伝承によれば安藤組（又はアンドン組）といって、古来、宮司家に仕えて来た、「本」「山下」「角」の三家の子孫でありますが、多分近世の門屋敷の名頭家であったと思います。

そして「オキョードン、マワラース…お経どんが廻って来られたぞの意」と呼びながら、かねて定まった道筋を通ると、各家人達はいくばくかの喜捨をもって待ち、おしいただいて帰るのです。これは、やがてやって来る十五日節句に炊いた飯ツブで、家の入口や、台所、場合により牛小屋の柱に貼り、来る一年間の御守りとします。[22]

この時配られたお札の版木が残っており、現地調査の際新たに刷ったものをいただいた（【写真】54）。版木を詳しく観察すると現在縦長の状態になっているが、本来は横長であったものを中央部で縦に二等分し、それを上下に配置を変えて、新たに別の板の上に釘で打ち付けているこ

とがわかる。

そのお札には文字が彫られているが、長期間にわたって使用されていることから、文字が潰れて判読が困難な箇所もある。上半分には「出世長寿大黒天」と題する文章が、下半分には米俵に乗った大黒天の像が彫り込まれている。文章と大黒天の中間に八幡神社の朱角印が捺されている。

【史料三】[23]

出世長寿大黒天

此御影美(み)る人な新(し)、美(み)乃竹乃

事故、ハさ(破損)無甚し、永く殪(たおれ)おけ李(り)、故

板行し千枚すり壱人に弐枚ツヽ、

五百人にあたゆへし

文久二壬戌年九月甲子(一八六二)

内容は出世長寿大黒天の御影を見る人はない。身の丈の事であるので破損が甚だしく、永く殪おかれていた。そのため、板行して一〇〇〇枚刷り、一人に二枚ずつ五〇〇人に与えよと書かれている。

これとほぼ同様の出世長寿大黒天の版木が島根県出雲市に残されている。出雲大社の御師が用いた版木の一つであるが、里八幡神社のお札は縦長であるのに対して、出雲市のものは横長になっている。年号は「文久四甲子」、懐中に入れて願いが叶ったら増し刷りして二枚ずつ五〇〇人に授けよと記されている。[24] 出雲大社のものは、「出世長寿大黒天」と年号の二行を除くと五行記されているのに対して、里八幡神社のものは四行記され、文章が若干異なるが、ほぼ同内容である。このことから、里八幡神社の出世長寿大黒天は出雲大社と何らかの関係を有していたことが推測される。[25]

文久二年九月の版木を携えた出雲大社の御師が甑島を訪れたのか、あるいは版木の文章にあるように、板行して増し刷りしたお札が甑島に渡り、そのお札を手にした人物が、新たに版木を彫り起こしたものであろうか。現在のところ、いずれとも断定はしかねる状態である。

しかし、文久二年九月以降のある時点から、この「お経どん」という神事が始められたという事は確実であろう。[26]

塩田甚志氏はこの出世長寿大黒天のお札が疫病や飢饉から逃れるために流入したのではないかと推測している。[27] 下甑村の事例であるが、実際に安政五・六年（一八五八・九）にコレラ、文久元年（一八六一）に腸チブス、同三年にコレラが流行したという。[28] たまたま文久二年の年号を有するお札が入ったというよりも、やはりこのような疫病等の退散を祈願して流入したと理解すべきであろう。

次に問題となるのは、大般若経と出世長寿大黒天が村内を巡回する意味である。南九州には、仮面や大型偶人像が神領内を巡回するという事例が鎌倉時代より見られる。

宝治元年（一二四七）一〇月二五日の関東下知状案[29]によれば、次のような事件があったことがわかる。寛元四年（一二四六）八月に年貢の済否を明らかにするために、八幡新田宮は神領薩摩国阿多郡に神人等を派遣した。そこで地頭鮫島家高（行願）と争いになり、神王面二面を家高が打ち壊してしまった。家高の言い分は、神人達があれこれと理由をつけて、鼓を打ち鳴らし、郡内に響き渡るほどの声を出したので、手足をじっとしておられず、神王面を打ち落としてしまったかもしれないというものであった。この家高の弁明そのものについて真偽が争われている

わけではないので、訴論人共にこれを真実と受けとめていたと考えられる。

ここから、八幡新田宮は年貢の収納のため神人達に神王面を持たせ（あるいは被らせたか）、神領内を巡行させ、その神威を楯にして、所当を収納していたことがわかる。

右の史料にはまた正八幡宮の例も引用されている。承久の頃（一二一九～一二二二）、大隅国帖佐郷で御家人良西が王面を奪い取るという事件が起こっている。これなども神領帖佐郷で年貢収納に関係して、巡行してきた王面を正八幡宮の神威と解した良西が奪い取ったものであろう。

猶、鹿児島神宮（正八幡宮）にはメジシ（黒）とオジシ（赤）の獅子王面が神領内を六〇日かけて巡回し、お祓いをして回る「シシ回り」と呼ばれる古来から続く行事があった。毎年収穫後の一〇月一五日以降行われた。お祓いの他に、翌年の「方」や豊凶、風雨等も村人に教えた。お祓いの後、各農家から籾米を一升ずつ初穂として収納していたという。[30]

八幡新田宮には元亨三年（一三二三）八月の新田宮本神人等名帳が残されているが、[31]そこには「猿田彦大神御車引神人二十五人」という記載がある。猿田彦大神とは瓊瓊杵尊が降臨する際、先頭に立って道案内した神のことで、この神を御車に乗せて引く神人達が二五人いたという意味であろう。

これは岩川八幡神社で行われている弥五郎殿、あるいは日置八幡神社のデオドン（大王殿）等と同様に大型の偶人像を牽引して、神領内を巡行するという祭礼がかつての八幡新田宮にもあったことを想定させる。[32]

また荒田八幡宮には八幡境廻りという行事が三年に一度行われていた。これは荒田村の四方の境にある随神祠に、神輿を舁いて四境を巡り神輿を随神祠に駐めるというものであった。この行列には浜殿下りの場合と同様に行列の先頭には鉾の先に仮面（猿田彦カ）がつけられていた。[33]

このように、八幡宮には神領内を神（仮面・大型偶人像など神威を表すモノ）が巡行するという風習が特徴的に見られる。[34]里八幡神社も八幡新田宮を勧請したものであったから、同宮の神事の影響を受けていたであろうことは容易に想像できる。

里八幡神社の場合は、仮面・大型偶人像などと異なり、大般若経が八幡神の神威を表すモノとして、それに神領内を巡行させるという風習を生じせしめたものであろう。それとは別に幕末に甑島内で疫病等が流行した際、疫病退散を祈願した出世長寿大黒天のお札も島内に流入していた。この二つが何時の頃からか合体して「お経どん」という神事になったものと推測される。

最後に里八幡神社に残された大般若経の稀少性について言及しておきたい。一体、江戸時代より以前の南九州にどれほどの大般若経が伝来していたのであろうか。これを網羅的に調べる方法は今ないが、大般若経そのものは決して珍しいものではなく、ごく普通にかなりの寺社に伝来していたであろうことが推測される。管見に入ったうちの幾つかをあげてみると中世では、串木野の冠嶽霊山寺[35]・正八幡宮[36]・国分の台明寺[37]・阿久根の蓮花寺[38]等に所見がある。

近世以降になると、各地の名勝志等に記述が散見される。例えば、伊作の海蔵院・多宝寺[39]、伊集院の妙円寺・広済寺[40]等といった具合にである。他に稲荷社[41]・花尾社[42]等にも大般若経があったことが確認できる。調べれば恐らく事例は更に増加する筈である。それだけ、南九州においても大

般若経は一般的に見られた経典であったのである。

しかし、薩摩藩では明治初年の廃仏毀釈で寺院は完全に廃絶され、寺院に伝わった経典・仏像・古文書等様々な宝物類も徹底的に廃棄された。そのため、近世以前で現存する寺院資料は極めて少ない[13]。このような状況のなか、江戸時代の版本の大般若経ではあるが、六〇〇巻全てが完全な状態で残存するというのは、鹿児島県では稀有の事例といえる。更に本稿で明らかにしたように、寄進者・寄進の理由等大般若経にまつわる歴史がある程度判明することが、里八幡神社の大般若経の歴史的価値を増していると思われる。

勿論、この大般若経だけが唯一ではなく、今後の調査によっては、同様の大般若経が発見される可能性は充分にある。里八幡神社の大般若経の歴史的価値を充分認識して、適切に保存し将来に渡って長く伝えていく必要があると思う。

註

(1) 正式な名称は「八幡神社」であるが、他の八幡神社と混同する虞があるので、史料からの引用以外では所在地の里を附して「里八幡神社」で統一する。

(2) 『三国名勝図会』など。

(3) 「日笠山文書」の神道裁許状にこれらの名称が見える（里村郷土誌編纂委員会編『里村郷土誌（上巻）』五〇〇・五〇一頁、一九八五年）。

(4) 『薩隅日地理纂考』。

(5) 『里村郷土誌（上巻）』一一三頁。猶、東京大学史料編纂所蔵の島津家本にて字句の補訂を行った。

(6) 『三国名勝図会』巻之三十。

(7) 『本藩地理拾遺集上（薩摩国）』鹿児島県史料集（31）。

(8) 一九九四年二月に調査をした五味克夫氏の報告書によれば、大般若経は一〇巻ずつにまとめられ、三箱に収納されていたとある。

(9) 鹿児島県内に近世以前の大般若経がどれほど残っているのか確かな情報は現段階で持ちあわせていないが、例えば志布志の大慈寺に宋版大般若経の巻第四八九のみが伝えられ、県指定有形文化財となっている事例が知られる（松下鉄太郎「大慈寺の什器について」、『鹿児島県文化財調査報告書』第一輯、一九五四年・『志布志町誌　上巻』四八〇頁、一九七二年）。

(10) 『講談社日本人名大辞典』一三七四頁、二〇〇一年、講談社。

(11) 松永知海「大蔵経に学ぶ―日本近世における高麗大蔵経の評価―」九頁（第二八回日韓・韓日仏教文化交流大会資料、二〇〇七年）。

(12) 一部の巻で末尾に墨書が見られたが、これらは例えば「三ノ六十九」（巻第三六九・【写真】51）・「四ノ五十五」（巻第四〇八・【写真】52：裏表紙見返しの紙を継ぎ足した部分の裏に墨書がある。きちんと裁断されており、他の巻の墨書が混入したとは考えにくい。また巻第四五五を確認しても裏表紙見返し部分に紙片の不足はない。墨書と巻数が異なる理由は判然としないが、現段階では、「四ノ五十五」と墨書された紙片が見返しに偶然再利用されたと考えておきたい。）・「四ノ四十一」（巻第四四一・【写真】53）等であって、この大般若経を製作する過程で書かれた数字であろう。

(13) 『阿久根市誌』三五二頁（阿久根市、一九七四年）や高向嘉昭『薩

摩の豪商たち』四四～四七頁（春苑堂出版、一九九六年）では「庸亮」となっているが、阿久根市立郷土資料館に展示されている「藍氏三官流系図」では「亮庸」とある。

(14) 徳永和喜『薩摩藩対外交渉史の研究』四三二頁、九州大学出版会、二〇〇五年。

(15) 前掲高向『薩摩の豪商たち』四七・四八頁。

(16) 出水市歴史民俗資料館編『崎陽古今物語』出水市教育委員会、一九九一年。

(17) 前掲徳永『薩摩藩対外交渉史の研究』四三二頁。

(18) 黒神喜樹編『阿久根の古文書』阿久根市立図書館、一九七一年。

(19) 前掲高向『薩摩の豪商たち』一一六～一二二頁。

(20) 『里村郷土誌（上巻）』四八一頁。猶、原本調査の際撮影した写真にて字句の補訂を行った。

(21) 菅村亨氏が一九九五年に行った調査所見による（日笠山正治「八幡神社のしおり」）。また、筆者も日笠山文書の調査の際に実見を試みたが、傷みがひどく充分な調査ができなかった。

(22) 塩田甚志「甑島里村の二つの民俗行事―お経どんと磯餅やき―」五二・三頁（『鹿児島民俗』第八一号、一九八五年）。

(23) 解読にあたっては、本館史料編さん顧問五味克夫氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

(24) 『日本の神々と祭り―神社とは何か？―』七五頁、国立歴史民俗博物館、二〇〇六年。

(25) 前掲日笠山「八幡神社のしおり」でも、出雲大社との関連性が指摘されている。

(26) この出世長寿大黒天の版木よりも古い版木が無かったということが前提になるが、現存しておらず、またかつて存在していたという証拠も今のところ見られないことから、このように表現した。

(27) 前掲塩田「甑島里村の二つの民俗行事」。

(28) 『下甑村郷土誌』五九八頁、一九七七年。

(29) 「新田神社文書」七一号（『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ十』）。

(30) 黎明館企画特別展図録『南九州の仮面―祈りと願いの世界―』八四頁、鹿児島県歴史資料センター黎明館、一九九二年。

(31) 「新田神社文書」一一一号。

(32) 拙稿「巡行する神王面」（『黎明』Vol.27 No.2、二〇〇九年）。

(33) 『三国名勝図会』巻之三。

(34) 八幡宮以外にもこのような事例は存在する。前掲『南九州の仮面』・向山勝貞『南九州の民俗仮面』春苑堂出版、一九九九年等を参照。

(35) 「冠嶽頂峯院文書」二一号、正応元年一〇月五日栄英・英海連署譲状（『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ十』）。

(36) 「桑幡家文書」一―4号、暦応二年一一月日正八幡宮講衆・殿上等訴状（『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ十』）。

(37) 「台明寺文書」文安四年卯月吉日日吉別当権律師弘蓮寄進状（東京大学史料編纂所蔵）。

(38) 『鹿児島県史料旧記雑録前編二』一三六二号。

(39) 『名勝志再撰方萬しらへ帳　伊作』（『吹上町郷土誌資料編』）。

(40) 『伊集院由緒記』鹿児島県史料拾遺XV。

(41) 宝暦一一年一一月六日大般若経寄進記（『鹿児島県史料旧記雑録追録五』二五九三号）。

(42) 正徳三年一二月一一日島津吉貴大般若経寄進状（『鹿児島県史料旧記雑録追録三』三〇五号）。

(43) 拙稿「鹿児島の廃仏毀釈について」（黎明館企画特別展図録『祈りのかたち～中世南九州の仏と神～』鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇〇六年）。

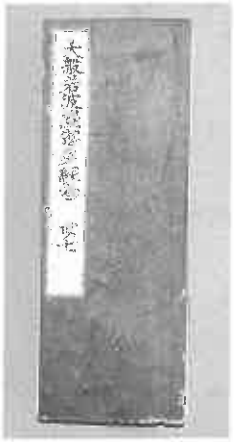
（本館主任学芸専門員兼学芸課企画資料係長）

【写真1】里八幡神社

【写真2】大般若経収納箱

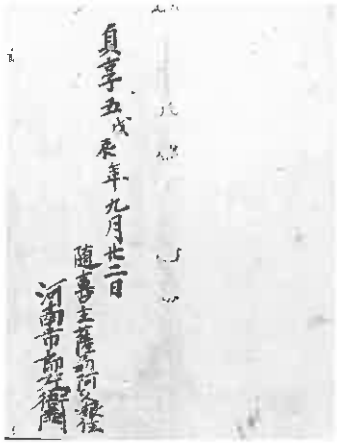
【写真3】大般若経収納状況

【写真4】大般若経収納箱内側墨書

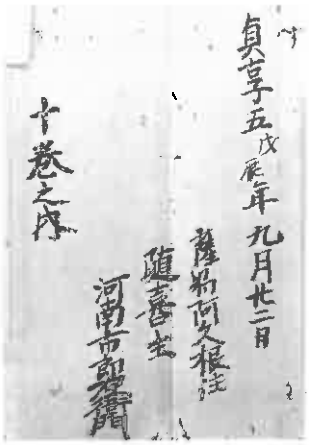


【写真5】大般若経（巻第三七）表紙

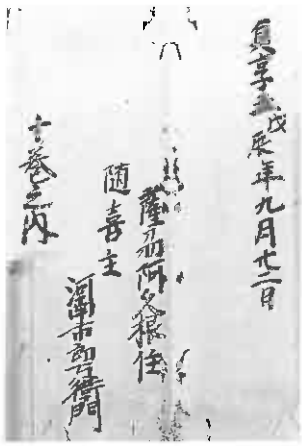
【写真6】帙に収納された大般若経



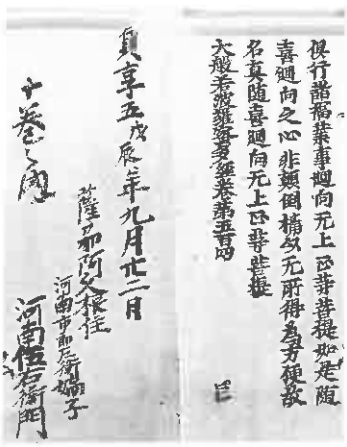
【写真7】奥書（巻第五〇一）



【写真8】奥書（巻第五〇二）



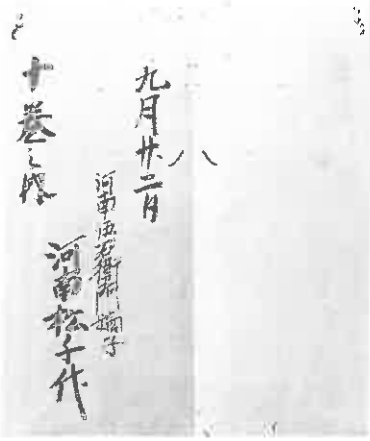
【写真9】奥書（巻第五〇三）



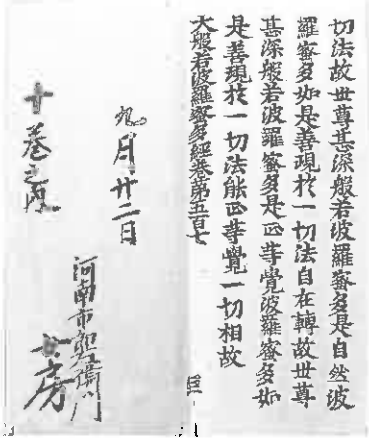
【写真10】奥書（巻第五〇四）

【写真11】奥書（巻第五〇五）

【写真12】奥書（巻第五〇六）



【写真13】奥書（巻第五〇七）

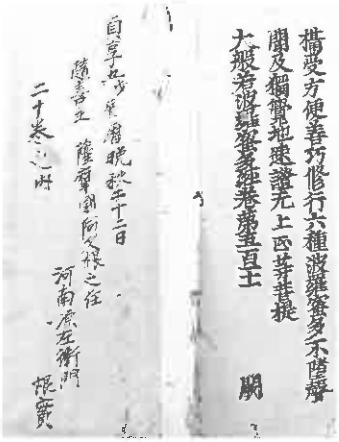


【写真14】奥書（巻第五〇八）

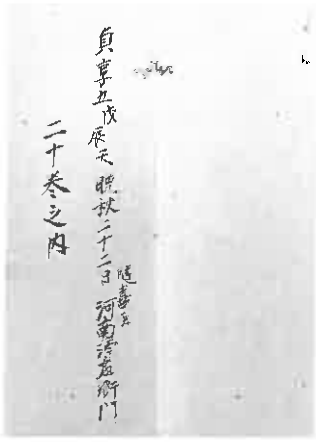
【写真15】奥書（巻第五〇九）

【写真16】奥書（巻第五一〇）

【写真17】奥書（巻第五一一）



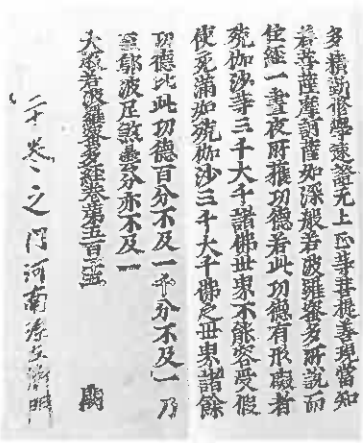
【写真18】奥書（巻第五一二）



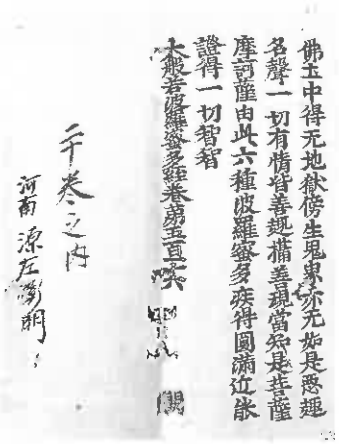
【写真19】奥書（巻第五一三）

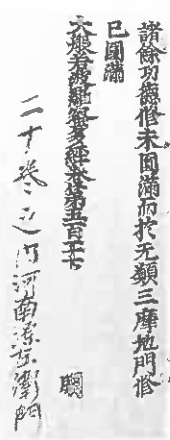
【写真20】奥書（巻第五一四）

【写真21】奥書（巻第五一五）

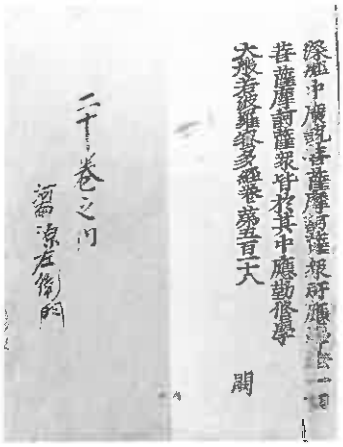


【写真22】奥書（巻第五一六）





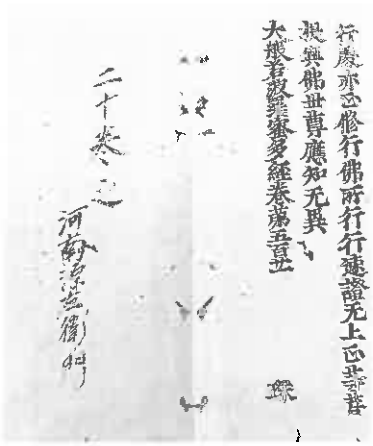
【写真23】奥書（巻第五一七）



【写真24】奥書（巻第五一八）

【写真25】奥書（巻第五一九）

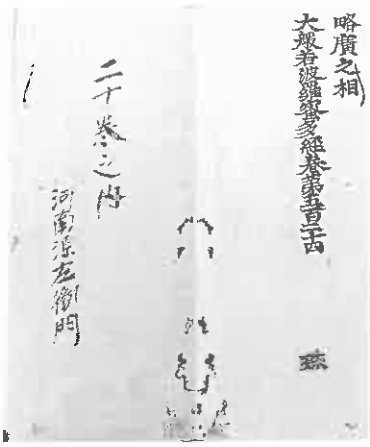
【写真26】奥書（巻第五二〇）



【写真27】奥書（巻第五二一）

【写真28】奥書（巻第五二二）

【写真29】奥書（巻第五二三）



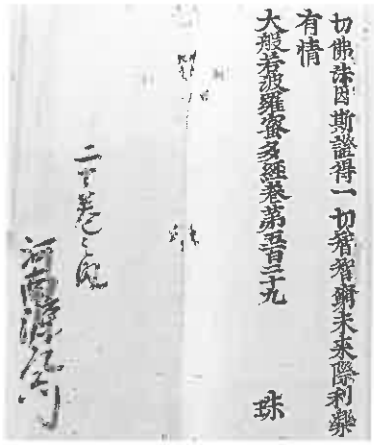
【写真30】奥書（巻第五二四）

【写真31】奥書（巻第五二五）

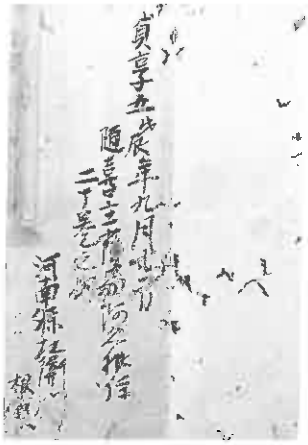
【写真32】奥書（巻第五二六）

【写真33】奥書（巻第五二七）

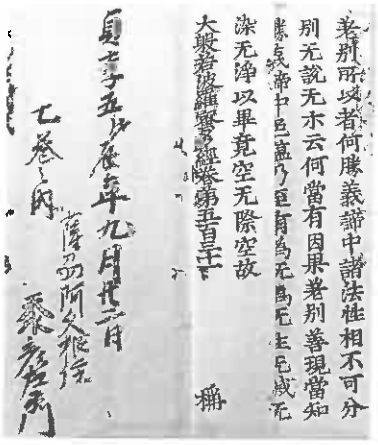
【写真34】奥書（巻第五二八）



【写真35】奥書（巻第五二九）

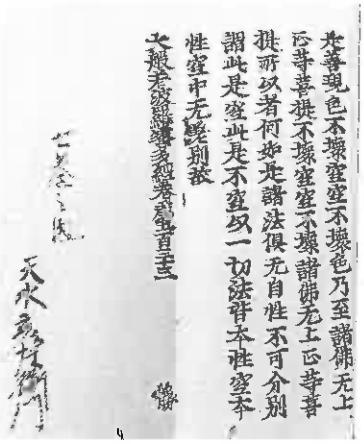


【写真36】奥書（巻第五三〇）

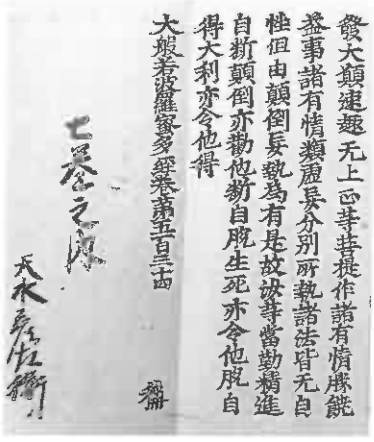


【写真37】奥書（巻第五三一）

【写真38】奥書（巻第五三二）



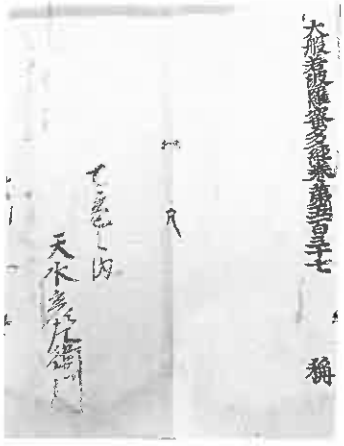
【写真39】奥書（巻第五三三）



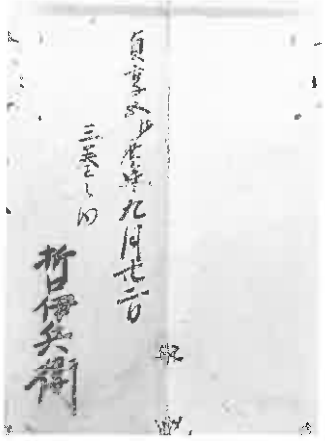
【写真40】奥書（巻第五三四）

【写真41】奥書（巻第五三五）

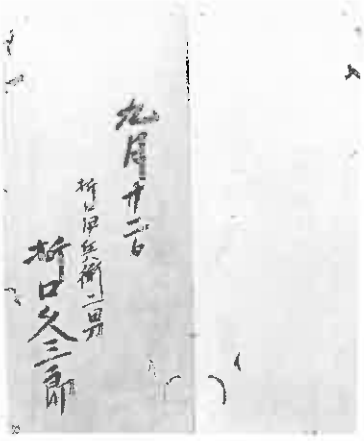
【写真42】奥書（巻第五三六）



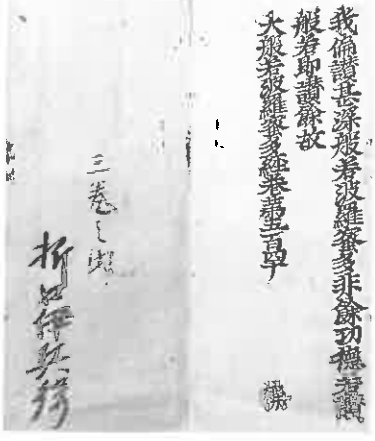
【写真43】奥書（巻第五三七）



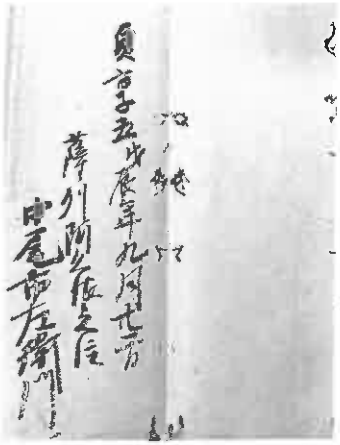
【写真44】奥書（巻第五三八）



【写真45】奥書（巻第五三九）

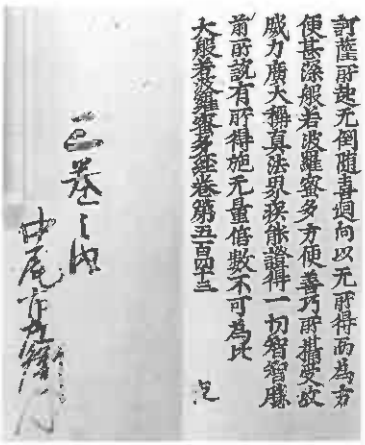


【写真46】奥書（巻第五四〇）



【写真47】奥書（巻第五四一）

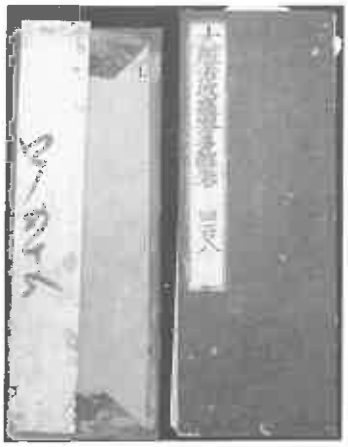
【写真48】奥書（巻第五四二）



【写真49】奥書（巻第五四三）

【写真50】識語（巻第六〇〇）

【写真51】墨書（巻第三六九）



【写真52】墨書（巻第四〇八）

【写真53】墨書（巻第四四一）

【写真54】出世長寿大黒天

【附記】本稿をなすにあたって、左記の方々に多大なご指導・ご協力をいただきました。ここにご芳名を記し、感謝の意を表します（五〇音順、敬称略）。

岸広徳・五味克夫・薩摩川内市川内歴史資料館・辻誠・日笠山正治・吉本明弘